魔法少女マジカルゆたか おまけ

かがみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女マジカルゆたか　おまけ

【Ｎコード】
Ｎ２８８４Ｍ

【作者名】
かがみん

【あらすじ】
魔法少女マジカルゆたかは元々ノベつく！という、ノベルゲーム制作サイトに書いた話です。おまけではほかの選択肢の方も載せていきます

魔法少女マジカルゆたか　おまけ？

ｈｔｔｐ：／／ｎｋ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２３２７ｍ／２／↑－２－の後から

ゆたかの顔に、ベチャリ、と白いものが飛んできた。

「ひゃあああっ！？」

びっくりして声をあげるゆたかに、ひよりはすかさずハンカチを差し出した。ゆたかは顔を拭う。

「これ、ホワイト…チョコ？」

「ごめーん、ゆーちゃん」

と、謝りながらゆたかの元に近づいて来たのは、こなたであった。

「お姉ちゃん」

「いやぁ、まさかこんなトコにまでチョコが飛んじゃうとは思わなかったよ～」

こなたの手には、彼女の好物のチョココロネが握られていた。

購買の人気商品、チョコたっぷりコロネである。

「まったくもう、こなたの奴は……」

呆れ果てた口調で、こなたの頭を小突いたのは、こなたの友人柊かがみだった。

「コロネをおふざけで振り回すから……ゆたかちゃんにまで迷惑かけちゃったじゃないの。こなたの馬鹿」

「かがみが避けるからだよ〜」

と、ツインテールの友人に不満を呟くこなた。かがみは眉を怒らせ、

「アンタが忍者ゴッコしようとか言って、コロネを吹き矢みたいにするからでしょ！？　誰が好き好んでチョコまみれになりたいのよ！」

見れば、かがみの制服には、所々にチョコがついている。

どうやら、かがみもコロネ吹き矢の犠牲になった模様であった。

「だいたい食べ物を玩具にしてると、バチが当たるわよ」

くどくどと小言を言うかがみ。こなたは「もうわかったから勘弁して」な顔つきである。

「ごめん、ゆーちゃん」

「い、いいよ。気にしないから」

実際、驚きはしたが、怒りはない。

「それにしても、チョコがついたユタカは萌え萌えでしたネ～」

顔を汚した白いチョコが何を連想させるのか、パティはやたら興奮していた。

彼女の言葉の意味が解るのは、この場では、ひよりとこなただけであった。

魔法少女マジカルゆたか　おまけ？

同じくｈｔｔｐ：／／ｎｋ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２３２７ｍ／２／↑－２－より

「きゃっ！？」

ゆたかの顔面に黒い物体がヒットした。

ぶつかって来たのは――――

「ミートボール？」

驚いた表情で拾い上げるゆたか。

「みゅ～　すまね～」

と、慌ててやって来たのは、三年生の日下部みさおと峰岸あやのである。

みさおは短い髪の八重歯が特徴の少女で、その親友あやのは、カチューシャの似合う清楚な美人だった。

「日下部先輩……」

目をぱちくりさせるゆたか。

「いやぁ、悪ィ悪ィ」

「もう、みさちゃんたら」

みさおは頭を掻き掻き、謝った。

「弁当食いながら喋ってたら、つい、なぁ――」

あやのとの話に夢中になり、箸で持っていたミートボールが、身振りを交えたとたん、すぽーん！　と飛んでいってしまった。

「これなら教室で食べてたらよかったってヴァ～」

「屋上で食べようって言ったのはみさちゃんだよ」

「そ、それはなんとも日下部先輩らしいっすね……」

「全くデス」

ひよりとパティは、冷や汗を頬に浮かべて得心した。

「あ～ぁ、大好物のミートボールがぁ～」

悲しい眼差しでミートボールを見つめるみさお。

自業自得とはいえ、ゆたかはなんだか可哀想になってきた。

「あのぅ」

おずおずと声をかける。

「みゅ～？」

「よかったら、これ、食べませんか？」

言って、弁当箱をみさおに差し出した。

「ミートボールじゃなくて、ミニハンバーグですけど」

みさおの相貌は感動で輝いていた。

「ホントにいいのか？」

「はい」

「みゅ～！　ちびっこの従姉妹は良いやつだな！」

みさおに異論はなかった。

「ありがとう～」

「よかったね、みさちゃん」

あやのは軽く頭を下げ、ゆたかに謝した。

「いいえ、もうお腹はいっぱいですし」

二人のお礼に、ゆたかは照れた。

「優しいねぇ、小早川さん」

「コレも萌え要素ですネ♪」

みさおはさっそく、ハンバーグを口に入れた。

「うめぇぇぇってヴァ！！」

泣いて歓喜の叫びをあげるみさおだった。

ゆたかはオーバーリアクションな先輩だなぁ、と思った。

魔法少女マジカルゆたか　おまけ？

ｈｔｔｐ：／／ｎｋ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２３２７ｍ／３／↑－３－の後より

右の道を行く――すると、

「あっ！？」

茂みから飛び出した黒い巨大ななにかが――　ゆたかに襲いかかった。

「きゃあぁぁ！？」

ゆたかは悲鳴をあげた。

バグゥッ！

ゆたかは黒いそれに飲み込まれた。

「あぁっ……」

そして――――肉塊と化して、草むらのなかに骸を晒すのだった……

……

―完―

※註
これはいわゆるバッドエンドです。
本編と逆の選択をすると、こうなったわけです。
次は、ユーノ君を拾ったゆたかはどうしたか、という話になります。

魔法少女マジカルゆたか　おまけ？

ｈｔｔｐ：／／ｎｋ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２３２７ｍ／４／より－４．１－Ａ

陵桜学園に戻ったゆたかは、まっすぐ生物部の部室に走った。

「あの、怪我してるイタチがいるんですけど」

「んー？　なんだ、まだ学校に残ってたのか？」

部室には、数人の生徒と顧問の桜庭ひかる先生がいた。

「なんだ、それは」

「フェレットじゃない？」

物珍しそうに、皆がゆたかの手元を覗き込む。

「実はこの子が道端に倒れてて……」

「ふむ。だいぶ衰弱してるようだな」

「どうしたら……」

「なに、餌をやって、ゆっくり休ませれば元気になるさ」

目を細めた小柄な生物学教師が言った。

「小早川、つまりはこのフェレットをうちで面倒みろと頼みたいわけだな？」

「えっと……その……」

「普通なら獣医に見せにいくわけだが、まぁここなら銭はかからんしな」

「先生……」

「いいさ、治療くらいなら私たちがしといてやるよ。なぁお前ら」

部員たちは頷いた。

「ありがとうございます」

「ところでこいつはどこのやつだ？」

「わからないです」

「どっかからか、逃げ出したのか？」

ひかるはフェレットをじろじろと観察する。

「首輪についてるのは、宝石か」

赤い珠に興味を示した。

「これで飼い主が特定できるかもしれんな」

ひかるは部員たちにフェレットを渡し、世話を命じた。

「とりあえず私たちが見ているから、お前はもう帰れ」

「あ、はい」

「明日の朝にでも見に来い。それと、こいつが元気になったら、警察に届けるからな」

「あ、はい。桜庭先生、どうもありがとうございます」

「ああ」

ゆたかは何度もお礼を述べて、学校を辞した。

翌日。

ゆたかが生物学部に向かうと、

「小早川さん、ごめんなさい」

と部員に謝られた。

ゆたかが理由を問うと、

「フェレット、夜の間に逃げ出しちゃったの」

いま　数人の部員たちが学校内を探しているがまだ見つかってはいないそうだ。

「見つかったら知らせるから」

すまなさそうに部員は言った。

それから捜索は続いたが、結局、あのフェレットの行方はしれなかった。

ゆたかは心配しつつも、ひょっとしたら、飼い主さんが見つけて連れて帰ったのかも、と思うようになった。

あるいは、誰かが自分のペットとして拾っていったのかもしれない。

何れにしよ。

ゆたかはその後、あのフェレットには、二度と会うことはなく。

やがてフェレットの記憶は忘却の彼方へと流されていくのだった。

―完―

魔法少女マジカルゆたか　おまけ？

ｈｔｔｐ：／／ｎｋ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２３２７ｍ／４／より－４．１－Ｂ

ゆたかは、街角の交番に足を運んだ。
イタチを抱えて、中に入る。

「あの～、迷子の動物をひろったんですけど……」

「おや、どこかのペットが逃げ出したのかな？」

お巡りさんがイタチを覗き込む。

「飼い主さんが探してるかもしれないので――」

「あぁ、わかったよ。それじゃ、この書類の必要事項に記入して」

と、お巡りさんに言われ、ゆたかは書き込んだ。

「これでいいよ」

お巡りさんは頷いて、

「じゃあ、この子は預かっておくから。飼い主が見つかったら、連絡するから」

「よろしくお願いします」
ペコッと頭を下げるゆたか。
ゆたかは安心して、泉家に帰宅した。

後日。

ゆたかは交番に赴いた。
あのイタチはどうなっただろうか……

「あ、お嬢ちゃん。いま電話しようとしてたんだけど……」

「どうしたんですか？」

お巡りさんは困った表情で———

「実はあのイタチ、檻から逃げ出しちゃってねぇ……」

「えぇっ」

「いま、捜索を始めたんだけど、ひょっとしたら誰かが盗んだかもしれないんだ」

檻はイタチが内側からでは開けらるはずもないから、おそらくは大胆不敵な盗人が、あの小動物を交番から盗んだに違いない。それが、彼らの意見であった。

「あの子……大丈夫かな」

「私たちが必ず見つけて、悪いやつを捕まえるから、お嬢ちゃんは心配しなくてもいいよ」

「はい、ちゃんと元の飼い主さんに返してあげてくださいね」

「約束するよ」

お巡りさんは請け負った。

だが、警察の必死の捜査にも関わらず、イタチも、盗んだ犯人も捕まえることは出来ず、捜査は手詰まりとなる。

ゆたかはイタチの安否を心配していたが、いつしかあのイタチは夢じゃなかったか、と思うようになった。

それから、二度とゆたかはあのイタチと出会うこともなく、日常が続いていった――

―完―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2884m/

魔法少女マジカルゆたか おまけ

2010年10月11日22時58分発行